東南アジア研究　43巻４号　2006年３月

ネットワーク，アイデンティティと華人研究
――20世紀の東アジア地域秩序を再検討する――*

劉宏**，廖赤陽***

Network, Identity, and Ethnic Chinese Studies: Towards a Re-examination of Regional Orders in 20th Century East Asia*

LIU Hong**and LIAO Chiyang***

This article is concerned with changing approaches to understanding and conceptualizing some of the central themes confronting the study of East Asia and the Chinese diaspora. Making extensive references to the relevant works in Chinese, Japanese, and English and subjecting their findings to both spatial linkage and horizontal contextualization, the authors argue that the study of East Asia and the Chinese overseas should be taken beyond a rigid nation-state framework and that greater attention be directed to the important role of network and its interactions with the state and market in the transnational arena. After identifying a "revisionist turn" in the recent literature dealing with Asian Chinese business/social networks and discussing its shortfalls, the authors contend that four key issues should be critically tackled in an effort to construct a post-revisionist synthesis: the historicity, spatiality, institutionalization, and limitations of networks. The complex patterns of interplay between region, network, and ethnicity constitute a significant dynamic in the evolution of East Asia and Overseas Chinese societies in the 20th century and beyond.

Keywords: East Asia, Chinese diaspora, network, identity, nation-state
キーワード：東アジア，華僑・華人，ディアスポラ，ネットワーク，アイデンティティ，国民国家

――――――――――――――――――――

* 本稿は，2005年９月5–7日に開催された京都大学東南アジア研究所東南アジアセミナー「東南アジアを超えて――華僑・華人研究のフロンティア」における報告“Transnational Chinese: Global Mobility and Embedded Networks”をもとに，それを加筆・修正したものである。

** シンガポール国立大学文学与社会科学院；Department of Chinese Studies, National University of Singapore, Singapore 117570；中国厦門大学東南亜研究院；Xiamen University Center for Southeast Asian Studies; e-mail: chsliuh@nus.edu.sg

*** 武蔵野美術大学造形学部；College of Art and Design, Musashino Art University, 1–736 Ogawa-cho, Kodaira-shi, Tokyo 187–8505, Japan; e-mail: liaochiy@musabi.ac.jp

I　問題提起

広義の東アジア地域（ユーラシア大陸東部地域の沿岸・半島及び島嶼，東北アジアと東南アジアを含め，海洋アジアに相当する概念）の経済発展，並びにいわゆるグローバリゼーションのうねりの中における華人ネットワークに関する議論は，既に20年近く続けられている。その間，大きく揺れ動いたネットワークに対する反応や評価さらに理論などが，比較的明確に表現されたことに比べて，具体的な実証研究は比較的停滞していたとみることができる。本論文は華人ネットワークに関する研究史の整理を通して，ネットワークの地域展開過程における市場・社会や国家の多階層関係を示すことによって，従来の「制度対非制度」「ネットワーク対国家」などの二極分化の分析モデルから抜け出すことを試みる。

筆者はここ10年来の研究において，地域研究に視点を置き，ネットワーク論を手段とし，華人を対象として，海洋アジアの近現代史及び同地域の経済・社会生活や文化的変遷について分析し，解釈を試みてきた。私たちが地域ネットワーク論のようなアプローチに惹かれる理由のひとつは，国民国家の硬直した枠組みの束縛から解き放し，より柔軟な研究空間を切り開くことに対しての期待の高まりであった。またこのことが国民国家の相対化への作業プロセスにも影響したと考えられる。しかし，具体的で実証的な検証を展開する前に，我々は現存する実在とそれを認識するという両面において研究を深め，両者の偏差を修正する必要がある。

まず，実在論の角度から言えば，ネットワーク論は東アジアの経済上昇期の産物である。1970年代後半期以後の東アジアの経済成長と衰退，危機と復活の現実は，ネットワーク論に対して，それが万能であるかのような不可思議な機能を備えているとみなすという認識に対して疑いを増加させ，これがまたネットワーク論の修正を導いた（この点はさらに後に詳述する）。

第二に，認識論の角度から見ると，現在まで，20世紀を対象として，東アジア地域の経済発展を包括的かつ構造的に捉えようとした比較政治経済論は，主に開発国家論（及びその修正理論など）であった。開発国家の典型的な政治形態とは，権威主義の政治体制であり，国家が市場に対して積極的に介入し，専業化した官僚が国を治め，並びに開発至上主義が国家目標として絶対的な価値を持つとされることなどである。全く同様な時間・空間及びそのもとでの問題に直面するとき, 開発国家論と我々がよく知る地域ネットワーク論が描き出す二つの世界は, かなり違った様相を示す。両者の認識論上の断層をどのように克服するかは，これら異なる視角から出た異なる理解を同一の時空の全体像のなかに置き，両者が対話・交流することによって互いの思考に次元を置き換えることを試みなければならない。

第三に，方法論の角度から言えば，我々は，曖昧で不明確ないわゆる華人ネットワークの概

念に対して，横方向の分析のみならず，縦方向のネットワークに関する整理も進めなければならない。このような基礎の上に，ネットワークと国家，社会，市場などの関係についてまとまりのある研究史上の回顧をなすことが出来ると考えられる。さらに，我々は華人ネットワークの空間概念について整理し，それを，地方・地域社会・トランスナショナリズムとグローバリゼーション等の理論と関連付ける必要がある。

本論文は，国民国家論を相対化しようとする角度から，華人ネットワーク論を構築しようとするものではなく，両者の相互関係に切り込むことを通して，これまでの華人ネットワーク論の思考次元を越える問題を提供しようとするものである。言い換えれば，我々は国家と社会，市場と文化，組織とネットワーク，フォーマルとインフォーマルなどある一つの範疇における二者択一の一方を強調することに固執するのではなく，またそれらを，こちらでなければあちらを，と見なすような二元対立的なゼロサムゲーム（Zero-Sum Game）とするのでもなく，これらの互いに依存し続ける要素の相互交錯と相互関係の構造と条件に関心を払おうとしている。筆者間のネットワークに対する理解は必ずしも一様ではないが，しかし，共通した関心事項は，ネットワークと国家の共生及びそれが社会市場の相互活動中における作用を如何に追求するかということにある。このことは，ただある特定のエスニック・グループの安全と発展に関係しているのみならず，広義の東アジア地域における発展と社会均衡を持続させることにも関係している。いわゆるグローバリゼーションは，ネットワークとアイデンティティという両者の交錯した作用のなかの矛盾を露呈させたのであり，別の角度から見れば，国家とネットワークの関係自体はかなりトランスナショナルな性格を持つものであり，グローバリゼーションの空間構造の下で拡大された国家と社会の関係についての問題でもある。

II　華僑・華人研究――その中心と周縁

単なる記述の記号ではなく，一つの分析装置としての華僑華人研究（以下，特定の場合を除く，「華僑華人」という用語を均しく「華人」と略す）は，主に20世紀に成長し発展してきた。この１世紀には同時に国民国家も全盛に向かった（但し，同時に次第に衰微し始めた）時期である。国家と民族が歴史の基本単位を構成し，またこれらの基本単位の総和が世界史という大きなピラミッドを構成してきた。前世紀以来の華僑華人研究は，まさにこの歴史の大きなモデルの投影でもあった。[1] いわゆる「国史」の枠組みの下における学問分野の基本構成は，以下の三つに具体的に表現される。

1）1970年代以来，中国・日本・米国において出版された幾つかのよく使用される目録・索引を例に挙げると，その編纂の体裁は，概ね総論或いは総合研究及び各国別研究に分けられる。国別研究は更に細分化され，政治，経済，文化，教育等の特定テーマに分けられた。これが華僑華人研究という ↗

第一は，華僑華人という研究対象についてである。無論，その名称や，その内包と外延についても，大きな論争があるが，しかし中国語圏で使われてきた「華僑」「華人」「華裔」は，その含意が簡単明快であるため，普遍的に受け入れられている。明らかに，これは特定の国民国家を円の中心として構成された重層的同心円である。すなわち，円の中心は華僑（制度範疇），円周は華人（文化範疇），円周の外は華裔（自然範疇）[2] という構成である。実際，19世紀末に「華僑」という語が正式に出現してから，ほとんどあらゆる「海外華人」問題に関する研究は全て民族国家及び領土性或いは地域性（territoriality）と密接不可分となった。このような地域性は（清末以降の）国民国家を含み，また海外華人の原籍地（僑郷）をも含むことができる。ある意味では，このような国民国家が導いたものは，中国歴史研究に対する啓蒙学派の方法論上における一種の延長であるといえる。[3]

第二は，横方向の空間分布についてである。華人研究は，まず各国別の華人研究へと分けられ，これを基本として，上方向へと引き伸ばされ，ある特定地域の華人史（例えば，東南アジア華人史，或いは東南アジア華人経済，教育等の特定テーマ研究）を統合し，世界華人通史となる。さらに下方向へと細分化されると，国別華人の特定テーマ研究へと引き伸ばされる。このような基本的な枠組みの下で，多数の国別華人研究及び国別華人特定テーマ研究の専門家が育成されてきた。[4] しかし，トランスナショナルな視野は未だに十分重視されているわけではない。

第三は，縦方向の時系列構成についてである。最も重要な時代区分は，1940年代後半から1950年代初めの間に設定された。これが華僑或いは華人の分水嶺であったからである。しかし，華僑であろうと華人であろうと，民族国家の指向性を根拠としていた。前者は中国への政治忠誠心へと導かれ，そして後者は新興民族国家への政治忠誠心へと導かれた。第二次大戦が終結した後，新興民族国家が重大な関心を寄せた核心問題は，如何に境界内のエスニック・グループ（特に華人）が政治上，居住国に忠誠を尽くすかという問題であった。このことは，一貫して1990年代まで海外華人が一種の政治と安全の「問題」として研究されるという動きを

↘ 学問分野の基本構成を客観的に反映している。そして，あらゆる国別または特定テーマ別華僑史もこういう思考の筋道に従ってきた［Nevadomsky and Li 1973；中山大学東南亜歴史研究所・中山大学図書館　1981；曽依萍・陳麗娘　1994；福崎　1996；徐斌　2003］。

2）ある比較的普遍的な見方としては，中国籍を有しなお且つ外国に定住する者は華僑とし，自らをChineseと認める者は華人とし，華人の血統を有する者を華裔とする。李光華［1991］を参照。華僑の形成と概念の変遷に関しては，王賡武の古典的論述を参照［1994a］。

3）例えば，ドゥアラ［Duara 1995］が強調する，「民族の歴史は民族を一つの統一的なもの，時間の中で不断に進展変化する民族主体と見なし，本質的には係争的・偶然的な民族は一種の偽統一性を構築する。このような変化の歴史は追従性的・目的論的啓蒙史のモデルの中で派生してきたものである」。

4）東南アジア民族独立国家が形成される以前，1930年代末から1940年代初めに，日本の満鉄東亜調査局が編纂した東南アジア各植民地別の華僑史叢書が次々に刊行され，その後の国別華僑史研究の基 ↗

直接引き起こした。この「問題」はまた，中国と周辺国家との関係に影響を与える重要な要素であると見られてきた。言い換えれば，海外華人が国民国家（無論，東南アジアの政府或いは中国であっても）をなすのであれば，立法と政策を通して，領土の内に境界を画定し限定した一種の「独自の範囲」を想定しなければならない。そして，彼らの活動領域もまたこれに伴ってある特定の政治実体と枠組みの中に固定される。中国側から見てもこのように捉えられたのであり，それら国境の外に住む者で，中国のパスポートを持つ者は「華僑」と呼ばれ，当地の国籍に入っている者は「華人」と見なされた。大陸では，政府であろうと学術界であろうとも，「華僑華人」は過去に使われた「華僑」に取って代わられたが，しかしその本質は一貫しており，つまり，民族国家の地位を至上かつ最高とするというものであった。

しかし，前世紀最後の20年間において，東アジア・東南アジアの歴史或いは現状の両方にあっても，上述の伝統的なモデルは厳しい挑戦を受けた。周縁を曖昧にしてなおかつ流動性さえも備えるネットワーク論が，国家史観を中心とし，境界画分に専念し，さらに硬直した華僑・華人史観を取り壊す道具となったからである。しかし，その後のネットワーク論の氾濫が，明らかにまた理論空洞化の危機を招き，更に，関係のある研究の中にネットワーク或いは組織，制度或いは非制度，地域或いは国家，海洋或いは陸地，流出（flow）或いは蓄積（stock）等のような様々の二極化の二項対抗モデルを生み出した。

いわゆるグローバリゼーションと情報化の時代にあって，華僑華人の研究範囲もまた急激に拡大し多様化した。一方で，国家が地方化とグローバリゼーションの二重の衝撃を受け，また他方で，民族国家・民族主義は却って地方意識・エスニック・アイデンティティや宗教精神などと共に強化された。資金・人口・技術・資源・文化・犯罪が地球規模で頻繁に行き交い，また大規模な移動と再移動によって，地球自体の僑郷化を意味するようになっている。これと同時に，中国自体の「華僑化」が急激に進展し，国内人口の頻繁な移動，地理的な境界や空間を越えてのコミュニティの形成によって，中国本土を研究することが海外華人を研究することの一つの手掛かりと為り得るようになっている。このような情勢は，前世紀60年代において西洋の学者が海外華人研究を通じて中国本土の歴史状況を読み解こうとしたことの逆転現象でも

↘ 本となった。しかし，このような「国別」の視点と「跨国」の視点における矛盾は，たとえ当時の政策実施の組み合わせのなかにあっても，はっきり露呈された。例えば，特定の「国別」の中にあって，華僑は欧米の植民地入植者と協力する外来者であり，助けを要する土着の人に対峙する。したがって，華僑は排斥，抑圧されるべき存在であった。しかし，大東亜共栄圏全体という広大な地域にわたる帝国の秩序の中にあって，原理的には，華僑は本来，ヨーロッパに対抗するためのアジア人内部の重要な勢力として利用されるべきである［宮原　2003］。第二次大戦後，台湾で1956年まで続いた『華僑志総志』出版の後，各国別華僑史或いは国別華僑の特定テーマ史が次々と刊行された。大陸では，1980年代後半に出版された各国別華僑史によって構成された東南アジア華僑史叢書は，その一里塚と見なされる。この前後，多くの国別華人の特定テーマ史或いは国別の総和的な通史或いは地域史が相次いで世に出された。最近の英文論著中において民族国家にスポットを当てたものとしては，Hsu and Serrie［1998］がある。

ある［Skinner 1979］。[5)]

ディアスポラの時代であるといえる現代にあって, いわゆる華人研究の範囲が徐々に広がり, その問題意識や研究課題も徐々に分散している。境界が日々曖昧になり甚だしい場合には消失の危機さえあるなかで，新たな中心の構成や研究分野の境界画定にむけた強い動きが生み出された。華僑華人学の設立に関する各種の構想は，正にこのような背景の下に生み出されたとみなすことができよう。[6)] しかし，このような努力は更なる危機を招く恐れがある。それが中心の確立と強力な辺境の主張であり，まさしく華人研究に周縁性・多縁性・流動性や可変性を失わせた［濱下 2004］。しかし，我々は次のように考える。すなわち，このようなこと全てが, 正にこの研究対象の基本的な特徴・意義の所在であり人々の心をつき動かすところである。それはまた，華人研究とそこにおける地域研究の整合性と社会科学的理論化（Social Science Theorization）のために大きな将来性を与えたということである。

III　時系列からみた華人史――ネットワーク・アイデンティティ・国家

1970年代以降，アジアの４匹の小龍及び中国などの経済成長に世界が注目しており，上述の地域経済の成長を支えている原因が, 伝統的国民経済体系中の基幹産業によるというよりも, 寧ろ市場経済と密接な関係がある輸出加工，投資及び地域間の人口・情報・物資・資金流動の活性化にあると言える。ただし，当該地域経済の活力は米国及び日本の二つの域外からのエネルギーの注入だけではなく, 更に主たるものは地域内部からの自発的エネルギーから来ている。そして，華人資本は正にこの内在的エネルギー集散の中心と見られている。また，アジア地域の華人経済活動は，グローバル化活動の重要な一部分を構成している［渡辺 1991; 1992］。アジアの経済成長に対して，1980年代に流行した儒家倫理という一つの価値ソフトを継承した後, 1990年代に, ギャリイ・ハミルトン（Gary Hamilton）らの華人ネットワーク論を社会構成と社会観念の基礎に置き, ネットワークを中心概念として欧米企業の類型とは異なる華人企業, 経済及びその社会活動が研究され，またアジア型資本主義の枠組みの構築が進められた。その後，華人ネットワーク及びそこにある不完全な市場経済などの外在環境，及びクローン資本主義（Crony Capitalism）などと呼ばれるアジアにおける経済発展の内在的特徴をめぐる功罪問題に対して，激しい論争がなされた。そして，この問題は当時におけるアジアの現状認識に限らず，アジアの歴史認識に対する深化にまで及んだ。

歴史研究の領域中にあって，研究座標の重大な転換が1980年代初めに行われ，浜下武志ら

――――――――――――――――――

5）ここ１世紀の海外華人研究のモデルと学術系譜の変遷に関しては以下を参照。葉春榮［1993］, McKeown［1999］, Liu［2006］。

6）「特集　華僑華人研究の視座と方法――華僑学の試み」『中国21』17［2003］

はその後「アジア交易圏理論」と呼ばれる視角を生み出し，アジア歴史研究の新たな動きを起こした。[7] 相互に関係する研究対象とその理論や方法は，広範でありまた多岐にわたるが，それらには四つの共通点が挙げられる。

まず，狙いは国民国家の相対化である。地域及び地域間の移動や交流の媒介領域として想定される「域圏」を取り上げ，国家に取って代えようとする分析である。これに伴って生じることは，近代化論の時系列分析に比べ，空間秩序が更に重視されたことである。次には，ヨーロッパ中心主義史観に対する反省に基づいて，ウエスタン・インパクトとアジアのレスポンスというモデルに挑戦し，またアジアの歴史的連続性・自律性の文脈から出発して，近代アジアとヨーロッパとの関係の歴史を再構築しようとしている。第三に，主要な研究対象は，近代化を象徴する産業資本及びそれによって生じた生産・製造過程にはないのみならず，またアジアの伝統的生活秩序における農民や小農社会でもない。これに取って代わるのは商業と流通の領域，及びその主体としての商人と商業組織である。以前においては，歴史の脇役ないし悪役らが正当な評価を与えられた主役をなすようになったとも言えよう。最後に，海洋はもはや陸地の辺境ではなく，地域関係を調整する磁場である。異なる政治・経済・文化の要素が海域において衝突・合流し，陸域は港湾都市或いは開港地を通し連結されて有機的なネットワークを形成する。これらの開港地は地域経済の中心地である上に，地域間交流の中継地でもある［廖赤陽 2000］。

しかし，歴史研究或いは現状研究にあっても，更に多くの華人ネットワークに関する実証的な研究による検証が必要であり，また学術界の主流と共に対等で有効な対話の土台を構築するようにしなければならない。ネットワーク論が比喩或いは分析装置として便利であり，有効であり，弾力性を有していたために，ネットワークという言葉自身がただちに氾濫した。華人ネットワークは，既にどこにでもあり，皆に認知された語彙となった。確かに，近代組織論に対する反省はネットワーク論の重要な命題である。しかし今日，あらゆる組織・集団内部の関係及び対外関係の領域は，全て理論上当然のごとくネットワークの範疇に入れられたかのような感がある。ネットワーク論の広まりに伴って，その理論内容の空洞化もまた生じてきた。

結局，神話的であろうと現実的であろうとも，ネットワークに対する種々の批判は，主に以下の４点に帰結する。第一に，必ずしも学術的ではなく，むしろ現実的な考察から出発しているものであるために，拡張主義の連想を引き起こすことを懸念し，できるだけ華人ネットワークの存在を否定するか，或いはその機能を低く評価する。これに似た主張は，中国・中華・大中華経済圏理論或いは構想に対する批判にも見られる。明らかに，その基本的な出発点は依然

7)『アジアから考える』東京大学出版会，全７巻［溝口・浜下・平石・宮嶋　1993–94］。また，以下を参照，浜下［1990；1997］，Hamashita［2002］，Arrighi, Hamashita, and Selden［2003］。『アジアから考える』に対する極めて深い評価は，孫歌［2001］参照。

として国家中心であり，同時に国家とネットワークという問題が敏感であることを如実に反映している。第二に，明確な境界画定の分析枠組みを欠いているため，ネットワーク自体が常に曖昧模糊として，ある種共通の認識を有する理論の枠組みを形成することが困難である。第三に，信用・関係などのような人間関係のモデルは，ただ華人にのみあるものではないため，少なくとも華人ネットワークを一つの理論と方法として特殊化する理由はない。[8] 第四に，人間関係，社会構造，行為モデル，或いは文化・アイデンティティ・市場の内在機能について過度に力説し，国家・制度・法体系等のネットワークを制約する外在環境を見落とす傾向にある，という４点の批判である。

ネットワーク論に対する批判は，アジアの金融危機の発生によって更に勢いを増した。確かに，ネットワーク論の原点の一つは，国民国家などの制度的要素を相対化し，延いてはそれと対立させることを試みようとするところにあった。しかし，現在，如何にして「国家を取り戻すか」（Bring the State Back In），この１点がまさしくネットワーク論自体の重要な課題となっている［Liu 2005］。

学術史を回顧してみると，ネットワーク論が国家に対面したときの「戸惑い」は，同時にまた１世紀にわたる華人史研究の主要な「戸惑い」でもあった。前世紀以来，華人研究は政治・経済・社会・歴史・人類学などあらゆる人文・社会科学の領域における蓄積を利用してきたが，そのなかでも華人経済とアイデンティティの二つのテーマに焦点を合わせてきた。前者が関わってきた領域は次のようなものである。移民元及び居住地における社会経済の背景・移民問題・華僑の為替送金・投資・金融組織・華人資本の形成及びその経済要素・経済属性・規模などの分析，また華人企業の組織・経営・商業ネットワーク等の研究である。そして後者は，国籍問題・民族主義・族群（エスニシティ）・地縁・血縁意識と儒家倫理・同化と融合・華僑華人政策・多文化主義と多文化社会の構築，及びその他の各種文化理論を含む領域である。

この二つのテーマにおいて，同時にまた地域ネットワークと国家アイデンティティの間における対話と対抗がなされてきた。歴史的に見れば，華人の経済活動はしばしば地域・ネットワーク・越境などの基本的な特徴を示してきたのであり，それは陸域を中心とする垂直型統治秩序からみれば，常に処理しにくい敏感な問題を形成し，また潜在的な挑戦を行うものでさえあった。同時に，華人の通商ネットワークは，朝貢貿易体制を支える基本的な部分であるが，それは陸上権力を中心に据えた海洋政策及び東アジアの国際体制の制約を受けざるを得ない。一方，アイデンティティは国民国家の形成及び西洋の国際体制の原理に基づいて展開された外交交渉の過程に伴って，歴史の舞台に上がった問題である［Hobsbawm 1990］。確かに，歴史上形

8）筆者がかつて指摘した［Liu 2001b］。社会資本（Social Capital）は，おそらく比較的に見ると今後更に説得力を増すような概念であり，海外華人ネットワークの構築の基礎と特徴を解釈する際に用いることができるかもしれない。

成されたアイデンティティは相当程度の多重的，多元的選択性を示したが，しかし，その核心は国民国家の形成，及びそれをめぐるエスニック・グループの位置づけを中心にして展開された。したがって，華僑華人のアイデンティティ意識の顕在化の主な歴史的契機は，19世紀後期における中国民族主義と国民国家形成の胎動に始まり，1945年以後の東南アジア民族国家の成立に及ぶ。仮説的に言うならば，多重アイデンティティ理論は，新たな国民身分の下のエスニック文化と経済的位置の確立が可能であるという論拠を提供した［Wang 1985；王賡武 1994b；2002a；Ma 2003］。これに対して，アイデンティティの文化的分割理論は，グローバリゼーションの局面におけるアイデンティティに対して根拠を与えることを試みた。

華僑華人史上におけるこのような「戸惑い」は，例えば，我々が現在の世界の状況を理解する助けになるかもしれない。Manuel Castells［2000］は，次のように考える。すなわち，一つの急激な変化と制御不能な世界において，アイデンティティ，特に原初的アイデンティティが主となり，延いては唯一の意義の源となって，抽象的で普遍的な道具主義としてのグローバルネットワークが，選択的に個体，群体，地域或いは国家を繋いだり切断したりする，という議論である。社会は次第にネットワークと自我との両極の対立に依拠して構築されるようになる。そうであるならば，国家史観を超越することを含めて，華僑華人のネットワークとアイデンティティの歴史経験が，両極の対話，疎通，関係或いは中間領域を形成する可能性があるか否か，あるいはまた日一日と不確かな世界を更に分裂させてしまうのか，という問いにつながる。

華僑華人史には各種の時代区分が存在する。無論，全体は1940年代後半から1950年代とその前の時代とを最大の分水嶺とする。この時期より前を華僑時代とし，この後を華人時代とする。これは既に一つの「定説」となっている。この時代区分はちょうど新中国成立及び東南アジアの国民国家独立期に位置し，国家史観から見れば明らかに合理的である。しかし，もしも国家とネットワークの歴史的関係から見たとしても，華人史は以下の四つの時期の展開に照らし合わせることができるであろう。そこでは，

・第１期　19世紀中葉以前の長い歴史時期
・第２期　19世紀後半から1945年
・第３期　1945年から1970年代後半
・第４期　1970年代後半から現在

以上の四つの時期が，一つの歴史的円環を画している。アジア近代開港前の第１期は，その主動因が，アジア地域内の伝統的貿易の形成とその発展変化であった。華商とインド・アラブ商人らが共同してアジア地域の伝統的通商ネットワークを支えていたのであり，西洋の商人はその中に参入した。第２期においては，資本主義世界市場の拡大と労働力市場の再編に伴って，華僑移民が大量に発生し，東南アジアなどの地で発達した華僑社会を形成した。19世紀末から1940年代まで，中国の民族主義が高揚を見せた。この時期の華僑経済は効果的に西洋と近

代の要素を利用して拡大し，血縁・地縁などの関係を紐帯として形成された華僑通商網・金融網・移民網・情報網が国境を越え，植民地統治体制とは異なった原理で，東アジア・東南アジア地域に連結された内在的能力を提供した。第３期においては，新興民族国家の誕生と経済民族主義の台頭に伴って，華人アイデンティティが中国から居住国へと転化し，華人経済もまた大きく新たな組み合わせを選択して国民経済の枠組みを推し進め，これによって居住国における民族資本の位置づけを追求しようとした。

マレーシアとインドネシアなどの国においても華人の大部分は居住国の国籍を得た。1975年，フィリピン華人国籍問題の解決に伴って，華人化の法律制定のプロセスは完成した。第４期，1970年代後半から1980年代までは，中国の改革開放と東アジア・東南アジアの経済の高度成長を背景に，華人資本が新たな国際化を開始した。1990年代，東アジア・東南アジアの高度成長を支えていた原動力の一つが旺盛な直接投資であり，そして直接投資の拡大がまた貿易の拡大をもたらした。華人の多国籍企業が日本・欧米企業とともに，アジア地域内における資金循環の重要なエネルギー源になり, そのことが投資地域の経済成長を刺激しただけでなく，また国を越えた生産・販売ネットワークの形成をも促進し，アジア経済と世界経済の統合を加速させた。[9)]

伝統的研究が強調するところは，上述の第２・第３の二つの時期の違いである。しかし，19世紀後半から1970年代のこの二つの時期を通して，我々は一つの共通した特徴を見出すことができる。それは民族国家指向の100年であったということである。当該時期はまさしくアジア民族主義及び民族国家の出現が重なり合い，その前期は中国指向と表現され，後期は居住国指向と表現される。まさに民族国家における歴史的位置というその１点を追い求めたことにおいて，両時期は同じである。また，第１期と第４期は共通の特徴を備え，後者は新たな歴史的条件の下，前者の歴史的要素に対して復活と拡大を行ったと言うことができる。改革開放後の中国経済の活力は，地域内部と地域間の資金の収集と流動を含めて，郷鎮企業の発展など，実際においては19世紀以前の中国の伝統的民間経済の活力の蘇生にあった［浜下 1990］。そして，1990年代以来のアジア経済の成長は，アジア活力の歴史的復活であると考えられており，この特徴が次のことを生ぜしめた。すなわち，商人と企業家が直接的なネットワークを形成し，これによってアジア社会の歴史的蓄積を持つ商業活動の活性化を導き，経済活動のエネルギーが再び始動させられ，これによって地域経済の高度成長を実現した［原洋之介 1996］。

他方，現有の「次地域区分」（sub-regional division）は，人為的にエスニシティと国家とを分裂させることによって，東南アジア華人問題研究を，地域の歴史的動向の中に孤立させる状

9）国際貿易投資研究所編『地域経済圏の結成と直接投資の変化に関する調査研究――華人企業の直接投資とアジア経済圏の生成』［1994］ならびに「特集　アジアの華人企業グループ」『アジ研ニュース』［1994］参照。

況を引き起こした。そこでは，国民国家論は固定的な地理境界及び土着の原住民的エスニシティと密接不可分であるという。Anthony Smith の見方によれば，種族コロニーは「共通祖先の神話，歴史，文化を備え，また特定の境域及び団結に対して互いに繋がりを感じている」［cf. Guibernau and Rex 1997］ということである。しかし，20世紀の前半において，東南アジアの華人は事実上，当地の境域及び原住民の歴史的伝説に対して関係を失っていた。このため，（土着）民族国家によって主要な言説が創られ，通常では華人は東南アジア国家の形成過程の外へ排除された。これが間接的に「華人問題」に対して，単独の分析範疇を作り，また（華人が）地域内部における運営過程の有機的構成部分とされない状況を作り出した。本論後半で論及するように，まさに国境を越えた流動性及びその「ここに居て，またあちらにも居る」という心理状態が東南アジア華人の一つの重要な特徴である［Liu 2001a］。フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）が次のように指摘する。「地域は説明の根本であり，同時に歴史における全ての実在に関係し，あらゆる全ての構成部分に関係する。それは国家，社会，文化，経済などである。人々がこれらの集合の中から，ある集合或いは別の集合を選択することに基づいて，地域の意義と作用は多少変化するものの，当然根本的には変化はしない」［布羅代爾（ブローデル）1993］。

これとは異なる研究もまた明らかにしていることは，例えば，19世紀までのアジアの地域秩序は横方向の地域商人ネットワークであり，この後，西洋の国際体制にこの伝統的な地域秩序が取って代わられ，これを改編して縦方向の近代国家体制の中に組み込まれた［籠谷　2000］という点である。この過程において双方が激しく衝突したが，しかし，華商は素早く「西洋近代」という歴史的契機を捉え，自分たちのネットワークを再編し，拡大した。第二次世界大戦までに，ラッフェルズ（Tomas Raffles）が構想した非公式帝国の基礎の上に，東アジア・東南アジアは香港とシンガポールという繁栄した貿易金融と移民の中心地を生み出した。この成功の鍵は帝国と華人ネットワークの連合にある［白石 2000］。これもまた英国の法律制度（ハード）と華人企業の精神（ソフト）が有機的に結合した結果である。それに比べて，東南アジアにおける日本軍政占領政策が失敗した原因の一つは，地域間の横のつながりと多方向の選択の可能性を有し，かつ歴史的ダイナミズムに満ちた華人通商ネットワークを切断したことに求められないこともない。それ故に，軍政占領区のブロック経済は早くからその内部から崩壊していく［小林 1993］。

中国と東南アジア関係の経験から見れば，1920年代から70年代に至っては，強い国家対弱いネットワークの時代であったともいえよう。1927年の中国「統一」によって，資産階級の黄金時代が終わった。1949年の新中国成立後，あらゆる社会資源は国家によって独占され，宗族・同郷団体などの伝統的社会ネットワークの存続基盤は根こそぎ崩された。シンガポールにおいても，独立後，伝統の華人社会とその文化資源の周縁化が目立っている。マレーシアとイン

ドネシアでは，国家とネットワークの矛盾は種族あるいは階級のチャネルを通して政治問題としてさらにデリケートとなり，それ故に，重大な社会衝突を引き起こした。しかし，1980年代以降，原初的アイデンティティの復活・強化およびグローカリゼーション（地方―地球化）を背景に，ネットワークと国家は互いに接近を図り，妥協・対話と相互利益を探し求めている。

いうまでもなく，異なる地域は異なる歴史を経験している。たとえ国家が強い時期においても, 縦方向で高度な統合を成し遂げてきたいわゆる単一民族国家のケースを取り上げて見れば, 国家政策の形成と実行におけるネットワークの重要性は明らかであった。たとえば，日本と韓国の経済成長は有効な産業政策によって支えられていると指摘された。しかし，この政策は政府側によって一方的に推し進められたのではない。各種の学閥，地縁，血縁などの非公式の連携網，および審議会，諮問委員会，業種団体などの中間組織がそのプロセスに介在している。こうして，いわゆる非公式の連携網が形成され，この連携網は有効な産業・金融政策の形成を促しただけではなく，行為者の間の信用拡大を果たし，交渉コストを抑え，さらに，スムーズな情報の流れをもたらした［小此木・文正仁　2001］。

このように，国民国家の内部も，ネットワークを通して社会と対話するメカニズムが蓄積されてきた。そして，上述したような，多元的で広域的な領域の中で帝国とネットワークの関係を処理した歴史的経験は，グローバル化の現代において更に重要度を増している。このため，我々はネットワークの内在的仕組みと空間的在り方に対して更なる整理を行わなければならない。

Ⅳ　水平的分類――関係と空間のネットワーク

何がネットワークであるのか，この問いに対して，今までに統一的な定義がされてこなかった。Edward J. Jay は，ネットワークを関係結合によるあらゆる単位の集合体と定義している［Jay 1964］。何夢筆（Carsten Herrman-Pillath）は，社会学と情報理論の基礎に基づくネットワークを「ある種，時間経過の中で相対的に安定した人と人の間の相互関係のモデルである。それは一定の個人の総体の中で，あらゆる想像可能な人と人の間の関係という粒子の集まりである」と概括している［何夢筆　1996：30］。Manuel Castells［2000：570］は，ネットワークが「一組の相互連結の交点（nodes）であり，交点とは曲線と自分自身が互いに交差する場所である」と考える。上述のようにネットワーク概念に対する定義はそれぞれに異なるが，しかし実質上それらはほぼネットワーク構成の四大要素である構成・資源・関係構造と機能を含意している。

ネットワークは一種の数学モデルでもあり，ネットワーク論は社会科学の各領域で広範囲に

応用されている。華人研究において，ネットワーク論はある時には一種の比喩とされ，分析装置ではないとされる。以下に，筆者が関心を持つ論題と結びつけて，十分に広がった華人ネットワークに対して横方向の分類を試みる。

1．ネットワーク化における人間関係

社会学の研究において，ネットワーク化における人間関係は「相互依存関係を備えた人間関係」或いは「固有意志と主体的単位（個人或いは集団）により各自の自由意志に基づき参加した組合」であると定義される［今井 1984; 金子 1986］。「関係」を媒介して華人ネットワークを把握し，そこにおける人間関係の外在規範・隠れた規則と文化内容の研究を議論し始めると枚挙にいとまがない。血縁，地縁，行縁及び神縁，学縁など各種の紐帯は集合の重要な媒体であると考えられている。そして，各種の華人社団は，社会諸関係のシステム化であると考えられており，社団に対する研究は，人と人の間のネットワーク説の基礎を定めていると言うことができる。第二次大戦前のフィールドワークに基づいた日本の関連研究では，その目的は中国社会の歴史的特質を究明することにあった［根岸［1951］1998；仁井田［1951］1989；今堀 1978; 1991; 2002; 内田［1949］1982］。新中国が成立した後，西洋の学者がこの伝統を継承して，海外及び香港・台湾の華人の宗族・同郷組織に対して優れた研究を進めた［Tien 1953; Skinner 1957; Cartier 2001］。そして，東南アジアを中心とした華人学者による同様の研究は，更に現地化の特徴を強調する。無論，多かれ少なかれ関わりのある学者はみな，ネットワークがただ関係する動態性と流動性の中にだけ存在することに注目する。それは多元化の世界に円滑に対応するための一つの多様化する選択への戦略か，或いは海外での再構築過程中における虚構と創造であるかもしれない［Omohondro 1981; Suehiro 1989; Carino 1998; Liu 1998］。

2．ネットワークの空間構造

空間を一つの構造と見なし，またネットワークを通して把握することは，[10] 国民国家の境界を越えた空間を通じてネットワークを「視覚化」することであると言えるかもしれない。この方法は最初，ウォーラスティンの世界システム論の啓発を受けた。例えば，「地域間の相互関係もまた，中心―周辺関係及び地域間ネットワークを基礎にして形作られた世界システム論と地域システム論の中心的な検討課題である」［濱下 1997］という場合である。前述の空間の

10）国際商業ネットワーク論の提唱者である家島彦一は次のように考える。「空間は構造によって形成される。そして，構造は複数のネットワークの組み合わせ及び連結によって構成され」「商業は様々な人々の広域移動と遭遇，及び随時，生まれる文化・経済交流によって誘発される触媒であり」「国際交通・運輸ルートの変動によって，これを軸とする広域的な交易ネットワークの構造の変動をも示す。この変化が反映される社会・経済・政治・生産・生態など各方面は，一地域社会と一国家領域を超えた広域圏構造と深く関係する」［家島 1991］。

ネットワーク化の構造を基軸として展開されるアジア交易圏理論において，[11] 華商は研究対象である特定エスニック・グループとして再び孤立させられることはなく，重要な小系統としてアジア交易圏の巨大な系統の中に組み込まれている。

当該理論の唱導者の一人である浜下武志は，朝貢貿易システムと呼ばれる前近代東アジアの国際システム論を構築した。そして，これを支え，またこのシステムに活力をみなぎらせていたのが，華商，インド商人とイスラム商人などの広域商人集団であった。西洋の商人はこれらのアジア商人の交易を通して，その中に参入していった［浜下 1997］（関係する論文は，溝口・浜下・平石・宮嶋編『アジアから考える』［1993–94］を参照）。また，籠谷直人らは日本の近代化をアジア通商の大環境の中で考察し，中国商人らによって構成されるアジアからの外圧が，日本の工業化と産業化選択の歴史的契機になったと指摘した［籠谷 2000；浜下・川勝 1991］。

古田和子［2000b］と廖赤陽［2000］は，それぞれ上海と神戸，厦門と長崎の華商ネットワークが構築した東アジアにおける広域的・多角的な商圏を具体的に描写した。そして，杉山伸也とリンダ・グローブ（Linda Grove）は，主張する近代アジア流通ネットワークを主題とする研究書［杉山・グローブ 1999；Sugiyama and Grove 2001］において，多くのケースの実証研究とネットワークの類型の整理を通して，「アジア経済の活力は，歴史上から見ても国境を越えて形成された物資，資金や人口移動にあった。そして，この貿易ネットワークの基礎を作り上げ，その中で重要な役割を演じたのは，疑いもなく正に華商，インド商人とイスラム商人の商業ネットワークであった」ことを示した。例えば，浜下武志の論文は中・日・韓の間の国境を取り除き，都市と地域間の大型の貿易ネットワークと決算システムによってテーマを分析し，また商店・貿易品（米や金）及び山西票号が朝鮮や日本において設立した多角的な金融ネットワーク及びその運用モデルを重要視した。Sherman Cochran の論文は胡文虎の「虎豹帝国」を分析対象として，胡氏及びその家族が如何にしてヤンゴンの一つの小手工業工場から発展してアジア地域内の一企業王国となったかを検討した。彼はとりわけ，家庭と親族の基礎の上に設立された個人的ネットワークの重要な働き及び胡氏の販売戦略を強調する。当該書は，ネットワークに対して二つの分類を行った。その一つが，アジア貿易における空間分析のマクロなネットワークの運用，例えば運輸，情報，金融などの近代的インフラ・ネットワーク，及び各大商人集団或いは商幇について，他の一つが，ミクロなネットワーク，例えば特定の商人或いは商店の貿易ネットワークである。

広域空間の地域構造を研究するとき，比較する基本空間は国別の境域ではなく，「地方」である。特に，シンガポール・香港・厦門・汕頭・上海・横浜・神戸・長崎・釜山・仁川などの

11）当該理論と関係する研究史の整理は，古田和子［2000b］を参照。

港湾都市の作用は重視された。近代の開港港湾は，内陸農村など地域市場内部と対外経済関係とを繋ぎ，また異なる開港港湾市場圏の中間領域であったと言える［濱下 1989］。これらの港湾を通して，東アジアの海域と陸地・河川が延伸し，数千キロを越える砂漠地帯まで繋ぎ始めた。港湾市場の間には階段式の縦方向の深度構造があるだけでなく，また平行的なものと多中心的なものがある。各港湾の情報・人口・資金を通じて，ただ上位市場の集約と中継を経るだけではなく，また横方向と多角的な流動もあった。前近代東南アジアの港湾都市と近代開港港湾が蓄積した歴史的活力は現在まで続き，最近の東アジア経済発展において，港湾都市が地域内と地域間の人口・物資・資金・情報・資金伝播の中心となっている。また，開港都市は華人の人間関係ネットワークシステム化の交点であり，ここには最も多くの商号や企業が集まるだけでなく，ほぼあらゆる華人団体もまたここで活躍する。

では，空間という概念はまたどのように拡大されたのであろうか。Carolyn L. Cartier［2001］の考察対象は，確かに僑郷或いは港湾に直接焦点を合わせてはいないが，しかし，それは地理文化や地理経済の視点から全華南地域を検討することで，却って「地域」という概念が，如何にして空虚で融通性がない地理というカテゴリーから，豊富な内容と流動性に富んだ社会と文化言語環境を備えた新概念へと転換させるか，ということを我々に気付かせる。著者は世界各地に散らばった海外華人について，表面上の空間的な結びつきが，海外華人に地方性アイデンティティとサブ・エスニック・グループのアイデンティティを形成させた直接的な外在的な背景であると考える。しかし，これと同時に，進行していた社会プロセスが似通った背景と経歴を有する海外華人をさらに密接に結びつけた。ここにおいて，著者は実際，郷里を出たという境遇とネットワーク構築の両者の間には密接な関係があると解釈する。

上述の時・空概念に関する検討は，確かにそれらの意味を深く悟らせてはくれる。しかし，さらにもう１点強調すべきことは，海外華人のアイデンティティ空間が，ネットワーク構築の過程で変わったと筆者が考えていることである。確かに，ある学者たちはこのことに対して深く検討を進めているが，しかし，その着目している焦点が国家アイデンティティの転向に集中しており，原籍国である中国に対する政治アイデンティティから定住国に対するアイデンティティへと変わっていることを指摘する［崔貴強　1990；原不二夫　2001］。しかし，実際に，海外華人の地域アイデンティティは国家アイデンティティよりも早く，後者は19世紀末に，孫文が海外にあって革命活動に従事した後にやっと出現した。現在，前者はまた復興の兆しがあり，またこの趨勢は益々盛んになっている。それならば，我々はどのようにこのアイデンティティ空間の転換と反復を考えればよいのであろうか。同じく，地域アイデンティティの前後の差異はどこにあるのか。地域アイデンティティは今日の海外華人社会のネットワーク構築において，更に内在的空間拡張能力を備えているのか。狭い地域空間を見て，如何にしてそこに現代のグローバリゼーションという更に広大な「空間」プロセスを構築し反映させるのか。こ

れらは全て我々が更に一歩踏み込んで考えるべき問題である。

V　縦方向への整理――華商ネットワーク研究と修正主義

いわゆるネットワークは，研究視角と問題意識によって，社会，文化，宗教，商業など，多くのパターンと類型があげられる。次に，華人社会において最も重要と思われ，かつアジアにおける地域秩序の歴史的形成に深く影響を与えてきた華商のネットワークを取り上げ，その研究史的整理を進めながら，ネットワーク，文化と国家の相互関係の分析を試みたい。

まず，ネットワークとその異なる研究動向に対して簡単な整理を行い，続いて我々が近年出版した著作から学者が如何にして再考し，また新たな研究視角を提案したかを見たい。1991年にギャリー・ハミルトン（Gary Hamilton）主編の『東・東南アジアにおける商業ネットワークと経済発展』［Hamilton 1991; 1996］が出版されてから，東アジア華人経済におけるネットワークの作用の問題が広範囲にわたる注目を集め，関係する研究も次々と世に問われた。それらは大体において二方向に分けられ，その一つが文化主導論（Culturalist Perspective）をなし，海外華人の経済的成功は，彼らの種族と文化的な特徴の結果であるとする。例えば，儒家思想，勤労節約，規律や権威を求めること，家族的伝統などである。もう一方の研究動向は構造主導論（Structuralist Perspective）と称されるべきであり，それが注目するのは海外華人と生きる手段としてのエスニシティではなく，華人企業家が置かれている社会政治環境及びこれによって形成される国家と華人ネットワークの戦略的連合である，という議論である。この外，グローバリゼーションの過程に伴って形成された国際労働分業及び華商の組織的特徴もまた，構造論者が注目する論題である。

実際には，これら華人企業家及びそのネットワークに対する二つの研究動向は，学界の企業家研究に対する一つの縮図である。Patricia H. Thornton［1999］は，企業家に対する社会学的研究には二つの主要な研究動向があると指摘する。それは供給学派（Supply-side School）と需要学派（Demand-side School）である。前者が強調するのは個人の素質，例えば心理・社会・文化・種族的な特徴であり，またそれらの変容に関係するメカニズムについての分析を結びつけ，その上で企業家の形成及びそれと専門の経営者との差異を検討する。供給学派が注目するのは，個人の達成動向，抑制力，冒険心，対処方法，独創性，指導力，価値観及び社会化の経歴である。そして，需要学派は企業家の実際行動，彼らが如何にして移り行く社会環境の下で政策決定を出すかに着目する。言い換えれば，それは更に「プッシュとプル」の力学関係を重視する。例えば，業種の好不調，政府の政策，市場の状況及び科学技術の変化などである。以上から分かるように，企業家の精神に対する古典的な分析はその内包と外延にまで留意されている。しかし，国民国家概念の主導的な影響により，大部分の研究は特定の時間と空間（例

えば，移住国と原籍国）に限定されていた。最近になって，グローバリゼーションがまさに発展しつつあることに伴い，多国籍企業の精神がやっと学界の主要な関心を得るようになった。

確かに，学術界は東アジア華商ネットワークの形成，構築及びその主要な働きに対してある程度の共通認識を獲得した。しかし，この過程は多くの理論と実証問題が整理されなければならない。そして，1997年から始まったアジア金融危機は，一層人々に現有の研究モデルを反省するよう促した。ここ５年間に出版された何冊かの論文集は，全て違う角度から華人商業史におけるネットワークの働き及びその限界性を検討しており，また期せずして劉宏が言う「修正主義の方向」（a Revisionist Turn）を表明した［劉宏　2003］。このような方向は二つの共通した特徴があり，構造を解体すると同時に構築を追求している。

まず，文化論に対する強烈な質疑と批判である。陳国賁主編の『華人商業ネットワーク――国家・経済と文化』は，学界と大衆媒体のネットワークに関する「神話」（Myth）に対する反省である［Chan　2000］。陳は序言において文化論者の見方を批判し，華人文化の多元性と複雑性及びその脆弱性（例えば，「コネ」の裏面）を強調した。彼はさらに華商ネットワークの研究では，文化を万能な解釈手段と見るべきではないことを指摘した。「あらゆる華人が全て成功した商人ではない。あらゆる成功した商人が全て華人ではない」。李勝生は華人ネットワークと華人移住者（Chinese diaspora）の定義そのものが，「曖昧模糊として論争中である」と主張する［*ibid.*: 262］。今ある研究は儒家の価値観に対して「高過ぎる評価」を与え，またこの思想を核心的「関係」として，社会ネットワークを分析する理論枠組みとしている，と批判する。彼は，例えば人間関係，互恵の原則，家庭での義務などの価値観を重視したのは，華人特有の文化的特徴ではなく，特定の歴史と時代環境（例えば，植民地及び植民地後の時期に東南アジアの国家が法制度を欠いていた）において生じたと考えている。

Terence Gomez と蕭新煌主編の『東南アジアにおける華人ビジネス』は，全編の冒頭で主旨を宣言している［Gomez and Hsiao　2001］。「まず，我々は現在流行している華人の機構・観念・実践が彼らの企業成長の原動力であるという観点に同意しない。ついで，我々は華人企業家が共同アイデンティティに基づく商業ネットワークに主に頼って企業を設立し，その企業を発展させたのかどうか疑問を持つ」［*ibid.*: vi］。編者は序言で，今ある研究が華人大企業集団の現状に集中し，その形成と発展及び華人中小企業に対する関心が欠けており，またこれらの研究が一般的に華人を同一の社会集団と見なして，その内側の部分を疎かにしている（これを一つの集合した総体とし，統一的な行動をとるとすることはできない）と指摘する。Gomez と蕭新煌は，「長期の商業関係の樹立を決めた最も有効な概念が株主権利の共用（interlocking stock）と役員兼務制（interlocking directorship）である」と考えている。しかし，「証拠明示」が少なく，この二つの結合方法は東南アジア国内或いは多国籍の華商大企業に存在していた。相反して，華人企業集団内部にはたくさんの衝突と矛盾があり，よって華人

企業の発展を制限していた［*ibid.*: 33］。この外，華人の商業ネットワークは，多国籍企業（特に，日本）と共に更に多くが進められた，とする。Gomezと蕭新煌主編の別の論文集『華人企業・トランスナショナリズムとアイデンティティ』もまた同様の立場に立っている［Gomez and Hsiao 2004］。Kevin Hewisonは，同書においてタイの華人企業に関する個別案件で，金融危機に対応していた時，華人と国内或いは地域内の華商との提携は少なかったと明示している。Gomezはマレーシア華人の英国での投資研究において，彼らが当地での華人の提携に熱心ではなかったことを明らかにしている。

Thomas MenkhoffとSolvay Gerke主編の論文集『華人企業精神とアジアにおけるビジネス・ネットワーク』［2002］は，この10年来の華商ネットワークの研究には明らかな間違いがあったと強調する。例えば，東南アジア華人の画一性，華商が先天的なネットワークの運営者であるとしたこと，中国・香港・台湾及び海外華人が共同で一つの排他的な地域ネットワークを形成したとしたこと，親族関係が華商ネットワーク構築の有効な潤滑油であるとしたこと，華人資本主義が一種独特なモデルであるとしたことを強調したこと等々である。Thomas MenkhoffとSolvay Gerkeは，97/98年のアジア金融危機が，この現今のモデル（及びそれに関係する問題と解答）に対して，眼前での直接的な挑戦を迫ったと指摘する。経済危機は東南アジア（華人）経済の基本的な欠陥を暴露した。例えば，透明度や有効な企業管理（corporate governance）を欠いていること，姻戚関係，クローニー資本主義などである。彼らは，華人の伝統的姻戚関係（例えば，宗族・エスニック・グループと地域ネットワーク）が戦後時期において既に「解体」し［*ibid.*: 33］，また，親族ネットワークが華人企業の対外経済交易中において，ただ弱い枠組みを提供しただけであると考えている。これと同時に，彼らは非親族関係の繋がり及びその重要性が過小評価され，そして，華人有力者間及びそれと土着の政治権力者との「策略的同盟」の意義をかなり重要視すべきであると考えている。この外，いわゆる「華人集団の地球規模ネットワーク」はただの「想像上の共同体」であり，統計資料上の根拠を欠いている，とする。

この次に，修正に賛成する者は，文化論者の神話を解体した後も，新たなモデルを構築することを試み，また社会科学の理論を華商ネットワーク研究に引き込んだ。例えば，陳国賁は『華人企業精神とアジアにおけるビジネスネットワーク』の序論において，あらゆる海外華人が二つの共通点を有していると指摘する。それは，差別された地位の者，及び自営業者と企業家になる者の人数が，他のエスニックグループと比べてその割合が高いことである。彼らは，華商研究を社会科学のメイン・ストリームに合流させるべきであると考えている。華人の苦境はGeorge Simmelの「異郷人」（Stranger）或いはRobert Parkの「辺縁人」（Marginal Man）理論を用いて解釈することができる。華人身分の不確定性は，「彼らの劣勢であるだけでなく，また彼らの長所でもある。先天的宿命でもあり，また一つの後天的選択でもある」。新たな研

究方向に至って，Gomezと蕭新煌は，三つの関係する主題を分析すべきとする。それは国家，社会，資本であり，その中でそれぞれを十分に考え，また相互に発揮される影響を考える。彼らもまた歴史的でありミクロな学問分野における研究の重要性を強調し，さらに実証的描写と革新的な理論を結びつけるべきであると強調する［*ibid.*: 34–37］。蕭新煌らの学者は東南アジアの台湾商人の研究において，「中華文化」が自然に「エスニック・グループ資本」に転化したという考え方に挑戦し，もう一歩進めてそれが「商業と投資の万能薬を作った」のではないことを指摘した。却って，在地の関係組み込み（relational embeddedness）が重要な点である。なぜならば，それが社会資本（social capital）或いは社会資源（social resource）に転換する可能性を持っているからである［蕭新煌・王宏仁・龔宜君　2002］。

修正学派を代表する，以上４冊の新著は一定の啓発性を備えており，現在の研究において文化を強調することや曖昧な理論が役目を終え，また基本資料収集などの問題についても見識ある批評が存在することを示した。この外，それらは「破る」と同時にまた「立てる」ことも試み，今後の研究のために選択肢を提供するという方向性を指し示した。しかし，それらの立論もまた一分のすきもないというわけではない。例えば，我々は華人文化と華人機構を相互作用の体系，或いはソフトとハードと見なす。華人の伝統的価値観，特に儒教道徳は，このような文化要素を「ソフト」，或いはノーベル経済学賞を獲得したダグラス・ノースが言うような「非公式強制」（習慣と行為基準）であるとする。それを有効に活用するためには，相互に許容する「ハード」或いは「公式強制」（制度）を必要とする。制度は，「人類が考え出したその相互作用の定型をなす如何なる強制的措置」のために境界を画定し，それは「日常生活が提供する構造を通して不確定性を減少させる」。このように，「制度の枠組みは経済活動において重要な役目を演じた」［North　1990］。このような制度的なハードと公式な強制措置は，法制の不健全さや，長期的な協議と頼るべき財産権保護を欠くことを許容し，交渉コストが非常に高い植民地や植民地後の社会において重要な働きをした。華人社会組織は適切な行為基準を制定し維持することを通して，華人の文化的な価値観を守り，商業信用に有益な文化価値を育んだ。更に重要であるのは，それらが市場や法律の外にある第三者的な強制機能をなして，商業信用の有効な運用を保障したことである。

修正学派はネットワークの機構性と正規性に注目したが，他方では，華人商業の社会的特徴及び弾力性を明らかに軽視した。最近20年の研究において，その人間関係の結びつきによるネットワークが，常に華人の商業・貿易と企業活動の基本的特徴と見なされて来た。[12] 参考になるものとしては，アルフレッド・チャンドラー（Alfred Chandler Jr.）の大企業モデルがあ

12）日本の華人商業ネットワークに関する書籍は数多く出版されている。游仲勲は華人をネットワーク性の経済民族と位置づけて，それが同族間のネットワークを商業性の民族的特徴として世界中に広まり，また新たな経済圏を形成したとする［游仲勲　1990］。

る。つまり，家族資本主義が経営者資本主義へと向かう段階は，大企業が歴史の舞台に登場するとともに実現された。また家族企業が科学技術変革の背景の下に転じて現代の大企業になることは，歴史的に必然的であり必要であると見なされる。それは市場成長，企業規模の拡大，及び「現代企業における所有権と経営権の分離」を重視する。この学派にとっては，「誰が企業をコントロールするのか」，またこれに伴う「経営者改革」（Managerial Revolution）が最も革新的な問題である［Chandler 1977］。しかし，東アジアや東南アジアにおいて，家族経営は主要な経営モデルであり，今でも極めて大きな影響力がある。中小企業に限らず，1970年代から東アジア・東南アジアの企業経済発展において重要な役割を担った大型の華人企業の多くは家族経営であった。韓国の企業にあって，主要な家族支配企業の程度は，規模が拡大するにつれて強化される［服部 1990］。社会科学の角度から分析すると，アジアの経営は家族経営論と関係ネットワーク論の二つのモデルに分けることができる。前者は所有と経営の縦方向の序列を強調し，そして後者は企業の横方向の繋がりを強調する。しかし，両者は親族，社会関係や企業相互の相関関係を重視しており，また経営する場所の人間関係資源，この１点においては共通している［末広 1993］。よって，我々はさらに海外華人家族企業を一つの常態（つまり，畸形ではない）とし，その内部の転換（それはまた必ずしも管理権と所有権を分離した形で進んでいるとは限らない。例えば，余仁生公司に対して行った分析が明示している点[13]）を重視すべきであり，また華人企業及びそのネットワークをアジアという社会連動性が深く根付いた土壌の上で考察を加えることによって，我々は初めて「理解の共感」に富んだ観察を行うことができる。言い換えれば，我々は「誰が華人企業をコントロールしているのか」というこの問題に答えようとすると同時に，「華人企業がどのような社会，経済や文化の土壌及び国家・国際環境の下で運営されたのか」を検討しなければならない。この両者は有機的であり，互いに排除したり対立したりするものではない。

VI　結びにかえて――「脱修正総合」（Post-Revisionist Synthesis）に向けて

我々は，修正学派の論点が更に多くの同意を得るには，個々のケーススタディの蓄積，および華人史または華人研究を超えた総合的な視点を必要としていると考える。従って，冒頭で掲

――――――――――――――――――――

13）Yeung［2001］。Gardella, Leonard と McElderry［1998］の論文集の多くの文章が，チャンドラーのモデルは確かに重要ではあるが，しかしアジアの状況に用いる時，明らかに限界があること，例えば，彼は「人格」の要素及び政府と公共政策の機能をおろそかにしていると指摘する。Casson と Rose［1998］は，チャンドラー理論がネットワークをただ過渡的で特殊な形態であるとする点を批判し，また分散したネットワークが20世紀西洋の国際競争における優勢の重要な基礎であったと指摘する。これは，Staber, Schaefer と Sharma［1996］に見られる。Mary Rose がさらに，「チャンドラー理論が米国以外，また科学技術及び資本の密集に主に頼らない部分に用いられる時に，それは多くの現実的な困難に直面する」と強調する。これは，Rose［2000: 7］に見られる。

げたネットワークから見た地域秩序と国家が大きな課題として浮上する。従来，国家対社会，あるいは国家と市場のような枠組みは，多岐にわたる議論に及ぶものの，一つの学際的な共通の了解を得ているカテゴリーとして成り立っているのは事実である。しかし，国家対ネットワークは一つのカテゴリーとして有効であるか否か，まだ議論の土台にも載せられていない。

通常，国民国家は三つの解釈がある。1，民族を意味する国家，すなわち Nation。2，地理を意味する国家，すなわち Country。3，政治を意味する国家，すなわち State。これに対し，ネットワークは必ずしも対抗的な概念とはいえないが，少なくとも，いずれの意味においても異なる性格を示している。まず，ネットワークは常に原初的アイデンティティに基づいている。つまり，地縁，血縁，業縁，神縁，学縁やエスニック属性などは，華人ネットワークを形成する基本資源であった。国民的身分は華人ネットワークにとって特別な意味を持っていない。次に，主権と国境もまたネットワークにとって大きな意味を持っていない。むしろネットワークは国境を越えた横のつながりを基本の特徴としている。最後に，制度，権力などの上部構造に対し，ネットワークは主に社会的空間に形成されており，民間社会の「伝統」はネットワークを生かす土壌を提供した。時には，ネットワークは「非国家的空間」と呼ばれている［項飆 1998］。

濱下武志はネットワークを組織と市場の間に位置づけている。この観点はネットワークと国家の関係を理解する糸口を提供している。前述のように，歴史上，国家とネットワークはあるいは激しくぶつかり合い，あるいは接近と協調を探し求め，この関係は，異なる時期と異なる地域において，異なる形で華人史の展開に大きな影響を与えた。

国家とネットワークの関係は，さらに，地方化と地球化というより大きな空間において検討しなければならない。王賡武によると，中国の学術と政治伝統から見れば，「地方は中央以下の行政区域」を指している。しかし，海外華人研究の角度から見れば，地方は次のような意味合いを持っている。1，異なる僑郷。2，中国に相対する居留地本土。3，異なる類型の華人居留地。4，異なる類型の華人社会。5，華人が置かれている異なる類型の社会。その共通点は「独自性」にある［王賡武 2002b］。これに対し，グローバルに関してのひとつの解釈は，「地球レベルにおいての日常生活体験を標準化するプロセス。その特徴は，商品とアイディアの広がりであった」［Watson 2002］。

前世紀の後期から今世紀にかけて，地方化と地球化が同時進行する勢いは増している。グローバル化の波は資本主義市場と大衆文化，消費などの世界一体化，均質化をもたらした。一方，統一された国民国家の境界の裏側に隠されてきた地方性というものは，むしろグローバルを契機に積極的に蘇っている。それと同時に，ローカル化は，グローバル化を推進する動力となっている。まさにローランド・ロバートソン（Roland Robertson）が指摘したように，「ほとんどの現地化運動にとって，単にグローバル化に反対しているよりも，むしろグローバルという

競技場に参入する認識と要求であった」［ロバートソン 1997］。

日本では，1960年代後半から，地方の歴史，自然と文化資源を動員する町おこしは地域コミュニティにおける草の根の運動としてスタートした。1980年代以降，このような伝統の創造を通して地方の独自性を復活させる動きはグローバル化の進展に伴って，東・東南アジア各地に見られる。その主な狙いの一つは地域市場ネットワークと観光産業の拡大であった。このように，国家を相対化し，地方をコアに国境を越えた新たな歴史・文化・生活・政治空間を生み出す動きは，「ローカル・イニシアティブ」と呼ばれている［薮野 1995］。長崎では，ランタンフェスティバルという新たな伝統の創造を通して，東・東南アジアに及ぶ長崎交易ネットワークを復活させただけではなく，地方意識に基づく華僑のニューエスニシティも形成された［廖赤陽・王維 2004］。1990年代以来，中国は積極的に華人ネットワークの組織者の役割を演じてきた。各種の華人団体の世界聯誼大会は，大体各地方政府がその主催者であった。そして，前世紀の最後の20年間，華人の地縁血縁団体が次々と世界的組織ネットワークを作り上げた。地方性と原初的アイデンティティは，地球化の波に乗って地球化へと進む。

上述の２組のカテゴリーがひとつの座標を構成する。国家（A）とネットワーク（B）を縦軸の両極とすれば，地方化（C）と地球化（D）を横軸の両極を構成する。A 極は組織，制度と垂直統合に向かい，B 極はネットワーク，インフォーマルと横のつながりを示す。C 極は現地化，伝統と原初的アイデンティティを表す，D 極は流動，離散と均質化をもたらす。座標の四つの象限は，それぞれ中央と地方（AC），ネットワークと地方（BC），国家と地球化（AD），ネットワークと地球化（BD）などの諸問題に対応する。

こうした座標軸を以て，ネットワークの実証と理論に検討を加えると，歴史化，空間化，制度化，限界性という四つの課題が浮上している。

第一に，ネットワークの歴史化（Historizing Networks）が指すものは，華人ネットワークを歴史という言語的脈絡の下に置き，念入りに見て，歴史上における断絶性としての華商ネットワークのモデルと特徴に注意するだけではなく，現代ネットワーク史以前の歴史及び遺産をも見ることである。例えば，浜下武志による華僑送金や金融ネットワークに関する研究は，20世紀の華人ネットワークと歴史上の朝貢貿易システムの関連性を力説した。筆者の従来の研究もまたネットワークが生まれた歴史的土台を端的に示している［劉宏　2000；Liu and Wong 2004］。

第二に，ネットワークの空間化（Spatializing Networks）が指すものは，華人ネットワークの構築と変遷を流動的空間の下に置いて分析し，これを国民国家或いは地域の範囲内だけに限定しない。このようなトランスナショナルな性格は，アジア華人ネットワークにおける一つの核心的要素を構成した。このような時空的交錯は，ネットワークの多重性と変遷性を明らかにした。浜下武志は，「この数十年のうちに，国民国家と民族主義の時代が正に大きく変わった。

伝統的な，主に国民国家に基づく世界や世界観が，地球規模的，地域的，国家的及び地方の層が組織する多層的・多角的世界観によって取って代わられた」と強調する。彼はネットワークの空間化及びその歴史性に対して深く多元的な認識を有し，このような空間において海洋アジアの中の港湾都市を主要な結節点であると認識している。近現代アジアを結ぶものとしての港湾都市，それらはネットワーク運用の重要な担い手であり，港湾都市が国を越えたネットワーク構築の重要な支点と中心となっていた。[14] これをよりどころとして，村上衛は伝統的に省を分析枠組みとする研究方法を打ち破り，清末厦門の貿易構造及びその周辺地域との関係を検討した［2000］。

第三に，ネットワークの制度化（Institutionalization of Networks）が指すものは，異なる時空状況に対応しながら，ネットワークの形成を促し，その働きに根拠を与えた一定の安定性と価値ある機能を備えているシステムのことである。これらのシステムは，華人家族，社会組織や商業団体を含む。それらは華人ネットワークの中に取り込まれ，また社会紐帯と商業活動の密接な関係性を突出して示した。陳天璽［2001］のレインボー・ネットワーク理論は非公式な関係の重要性を見るだけでなく，また制度化の影響や機能にも十分注目している。制度性ネットワークの重要な結び付きは，親族観念と親族関係におけるあらゆる家庭的関係網である。陳麗園は次のように指摘する。海外に向けて生計を図る戦略及び両地に分かれて住む家庭構造は，海外華人と郷里間の相互関係の原動力となり，このような相互関係がまず家計の維持に現れた。こういう長期的で持続的な家族的関係網は，華人の身分アイデンティティを保持させ，また華僑原籍地と移民の居留地に対して直接的な影響を生んだ［2006］。

これと同時に，地縁と血縁の基礎の上に作られた華人社団もまた華人社会と商業ネットワーク制度化の組織の一部を構成した。游俊豪の研究によると，海外には全部で26カ所の番禺会館があり，また番禺人と関係のある組織もある。80年代以降，それらは海外の同郷と郷里を結ぶ重要な架け橋となった［Yow 2003; Liu 1999a; 1999b］。

第四に，ネットワークの限界性（Limitations of Networks）が指すものは，その先天的で後天的な機能，プログラム，発展過程中における脆弱性や効果の限界性である。我々は，ネットワークが何処にでもあるわけではなく，万能でもないことを知っている。その構築と成長においては，華人の種族的特徴及び社会経済環境の直接的影響を受けている。正に，浜下武志が指摘した如く，「海外華人ネットワークについては，経済発展の推進力によって広まり拡張したとする議論が次第に多くなっており，ネットワーク力に関する議論も徐々に多くなっているが，しかし，その弱点・曖昧性・弾力性を指摘するものがない」。彼の論拠として，「ネットワーク

14）香港はこの連結において重要な位置を占め，浜下武志は，「香港の歴史的ネットワークは，地域間における横方向の連結を基本とする『非組織的ネットワークのモデル』であり，民族・国家・地域を越えたネットワークのモデルを形成した」と考える［浜下 1996］。

はただ発展をもたらすだけでなく，同時に危機をももたらす。ネットワーク自体の本性は利潤を追求することである」点を明らかにしている。陳天璽もまた，あらゆる海外華人ネットワークは全て天性の傷つきやすさ（vulnerability）を持っていると考える。游俊豪の考察によれば，華人ディアスポラと中国との関係は，総じて文化・血縁などの原始的な感情によって駆り立てられたのでは全くなく，実際において故郷に対する感情の濃淡，それぞれのディアスポラがあった場所の国家機能や経済市場の発展，これらの３大要因が引き付けていたとする。

上述の四つの課題を通して，本論文の初歩的な考え方が，歴史的，空間的な視野から眼前の学術界におけるネットワーク，アイデンティティや民族主義に関する議論を改めて詳しく見直し，21世紀における華人史研究のあり方を模索し，また地域研究・エスニック研究の社会科学化と有機的整合を推進する助けになることを我々は希望するものである。

文献解題

１．　浜下武志．1996.『香港――アジアのネットワーク都市』筑摩書房.

濱下武志．1997.『香港大視野――亜州網絡中心』香港：商務印書館.

本書とその他の香港研究の大きな違いは，香港のローカリティを一地方史としての香港史の内部構築から求めるよりも，むしろ香港を取り巻く広域的な地域ネットワークの中から見出すところにある。同地の開港及び19世紀半ば以降に形成される近代アジア市場は，西欧資本主義による閉鎖的アジアの開放の結果とされてきた。しかし市場を実際に機能させたのは，すでに形づくられていた東アジアと東南アジアという二つの自律的な経済圏であり，中国大陸と太平洋を舞台に展開された多様な流通形態であった。香港はそこで，中継都市としての役割を歴史的に担ってきたのである，と著者は強調する。そして，香港の返還も，過去に支配的だった地域秩序に回帰しつつある現実とその歴史的背景に辿りつく。

２．　杉山伸也・リンダ・グローブ（編）．1999.『近代アジアの流通ネットワーク』創文社.

S. Sugiyama; and Linda Grove, eds. 2001. *Commercial Network in Modern Asia*. Surrey: Curzon.

本書は，19世紀半ばから1930年代に至る転換期のアジアを中心に，商業ネットワークの持つ意味を歴史的に検討し，西欧の衝撃とアジアにおける自立と変容，国境を越えた地域と流通の側面から近代アジアの経済社会の構造と展開を明らかにするものである。同書では，ネットワークを「論理」的に検討することにとどまらず，数多くのアジア商人グループまたは企業のケーススタディを提供し，商業ネットワークの機能とその実態の解明を

行った。

３．　Laurence J. C. Ma; and Carolyn Cartier, eds. 2003. *The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility and Identity.* Boulder, CO: Rowman and Littlefield Publishers, Inc.

本書は，地理学的パースペクティブから華人のディアスポラを考察するものである。著者たちは華人の移動とその定住を場所または空間のプロセスとして捉えることが重要であると考えている。彼らは，東南アジアをはじめ，オセアニア，北アメリカ，ラテンアメリカ，ヨーロッパなど，華人が重要性を示す地域なら悉く視野に入れてそのディアスポラを追跡する。本書は，同時に歴史学における重要なパースペクティブも提供した。空間の分布や，移動，経済的地位，職業構造，およびアイデンティティなどの側面から，1960年代以前の移民と現代における華人ディアスポラとの違いについて，鋭く分析した。

（本文の初稿は劉宏により「植民地台湾をめぐる中国の民族主義，日本の汎アジア主義，台湾の民族主義――1930・40年代の両岸関係と日本」（北海道大学，2005年９月2–4日）国際シンポジウムにおいて発表された。筆者はこの場を借りて北海道大学法学部松浦正孝教授による同シンポジウムへの招聘と助成を感謝する。なお，鷲尾浩幸先生に本文を訳して頂いたことを，心より感謝する。）

参考文献

中国語

布羅代爾（ブローデル）．1993.『15至18世紀的物質文明，経済和資本主義』施康強；顧良（訳）．北京：三聯書店.

陳達．1938.『南洋華僑与閩粤社会』長沙：商務印書館.

陳麗園．2006.「華人与東南亜華人社会的互動関係――以潮州僑匯網絡的研究為中心，1911–1949」シンガポール国立大学博士学位論文（稿）.

崔貴強．1990.『新馬華人国家認同的転向（1945–1959）』シンガポール：南洋学会.

何夢筆（Carsten Herrman–Pillath）．1996.『網絡，文化与華人社会経済行為方式』太原：山西経済出版社.

李光華．1991.『美国華僑問題与我国僑政措施』台北：華僑通信社.

劉宏．2000.『中国―東南亜学：理論建構・互動模式・個案分析』北京：中国社会科学出版社.

――――．2003.「亜州華商網絡研究的範式変遷」同著『戦後新加坡華人社会的嬗変：本土情懐・区域網絡・全球視野』179–211ページ所収．厦門：厦門大学出版会,

王賡武．1994a.『中国与海外華人』香港：商務印書館.

――――．1994b.「東南亜華人身份認同之研究」『中国与海外華人』233–262ページ所収.

――――．2002a.「再論海外華人的身份認同」『海外華人研究的大視野与新方向』劉宏；黄堅立（編），97–118ページ所収．新加坡：八方文化出版公司.

――――．2002b.「海外華人社會與地方史文獻」『海外華人研究的大視野与新方向』劉宏；黄堅立（編）所収.

孫歌．2001.『亜州意味着什麼――文化間的「日本」』　台北：巨流.

項飆．1998.「流動，傳統網絡市場化與『非國家空間』」『國家與社會』張靜（主編）所収．浙江人民出版社.

徐斌（編）．2003.『華僑華人研究中文書目』厦門：厦門大学出版社.

蕭新煌；王宏仁；龔宜君（主編）．2002.『台商在東南亜――網絡・認同与全球化』台北：中央研究院亜太研究計劃.
葉春榮．1993.「人類学的海外華人研究――兼論一個新的方向」『中央研究院民族学研究所集刊』春季号：171–201.
曽依萍；陳麗娘（編）．1994.『華僑華人問題研究文献索引（1980–1990）』厦門：厦門大学出版社.
中山大学東南亜歴史研究所；中山大学図書館（編纂）．1981.『華僑史論文資料索引（1895–1985）』広州：中山大学.

日本語
陳天璽．2001.『華人ディアスポラ――華商のネットワークとアイデンティティ』東京：明石書店.
福崎久一（編）．1996.『華人・華僑関係文献目録』東京：アジア経済研究所.
古田和子．2000a.「アジア交易圏論とアジア研究」同著『上海ネットワークと近代東アジア』所収．東京大学出版会.
――――．2000b.『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会.
浜下武志．1990.『近代中国の国際的契機』東京大学出版会.
――――．1996.『香港――アジアのネットワーク都市』筑摩書房.
――――．1997.『朝貢システムと近代アジア』東京：岩波書店.
濱下武志．1989.『中国近代経済史研究』汲古書院.
――――．1997.「地域とは何か」濱下武志；辛島昇（編）『地域の世界史(1) 地域史とは何か』山川出版社.
――――．2004.「21世紀の華僑・華人研究――研究動向と新たな課題」『華僑華人研究』創刊号.
浜下武志；川勝平太（編）．1991.『アジア交易圏と日本の工業1500–1900』リブロポート.
原不二夫．2001.『マラヤ華僑と中国――帰属意識転換過程の研究』龍渓書舎.
原洋之介．1996.『アジアダイナミズム――資本主義のネットワークと発展の地域性』NTT 出版.
服部民夫．1990.『韓国経済の発展』文眞堂.
今井賢一．1984.『情報ネットワーク社会』岩波新書.
今堀誠二．1978.『中国封建社会の構造』日本学術振興会.
――――．1991.『中国封建社会の構成』勁草書房.
――――．2002.『中国封建社会の機構』汲古書院.
籠谷直人．2000.『アジア国際通商秩序と近代アジア』名古屋大学出版会.
金子郁容．1986.『ネットワーキングへの招待』中公新書.
小林英夫．1993.『日本軍政下のアジア』岩波書店.
国際貿易投資研究所（編）．1994.『地域経済圏の結成と直接投資の変化に関する調査研究――華人企業の直接投資とアジア経済圏の生成』国際貿易研究所.
廖赤陽．2000.『長崎華商と東アジア交易圏の形成』汲古書院.
廖赤陽；王維．2004.「ローカル・イニシアティブにおける伝統の創造――長崎ランタンフェスティバル（春節祭）とニュー・エスニシティ」『東洋文化研究所紀要』146：45–68.
宮原　暁．2003.「戦前日本の華僑観と『他者』認識――『血』と『地』をめぐって」『中京大学アジア研究所論集』第４号.
溝口雄三；浜下武志；平石直昭；宮嶋博史（編）．1993–1994.『アジアから考える』全７巻．東京大学出版会.
村上　衛．2000.「清末厦門における貿易構造の変動」『史学雑誌』109(3).
根岸　佶．1951.『上海のギルド』日本評論社；復刻，大空社，1998.
仁井田　陞．［1951］1989.『中国社会のギルド』岩波書店.
小此木政夫；文正仁（編）．2001.『市場・国家・国際体制』慶応大学出版会.
ロバートソン，R. 1997.『グローバリゼーション――地球文化の社会理論』安部美哉（訳）．東京大学出版会．（原著 Robertson, Roland. *Globalization: Social Theory and Global Culture.* Sage Pubns.1992.）
白石　隆．2000.『海の帝国』中央公論社.
末広　昭．1993.「タイの組織化と工業化」『発展途上国のビジネスグループ』小池賢治；星野妙子（編）所収．アジア経済研究所.
杉山伸也；グローブ，リンダ（編）．1999.『近代アジアの流通ネットワーク』創文社.

「特集　アジアの華人企業グループ」1994.『アジ研ニュース』1994年11月号．アジア経済研究所.
「特集　華僑華人研究の視座と方法――華僑学の試み」2003.『中国21』17.
内田直作．1949.『日本華僑社会の研究』同文館；復刻，大空社，1998.
――――．1982.『東南アジア華僑の社会と経済』千倉書房.
渡辺利夫．1991.『華人ネットワーク』実業の日本社.
――――．1992.『局地経済圏の時代』サイマル出版社.
薮野祐三．1995.『ローカルイニシアティブ――国境を越える試み』中公新書.
家島彦一．1991.『イスラム世界の成立と国際商業――国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店.
游仲勲．1990.『華僑――ネットワークする経済民族』講談社.

英語

Arrighi, Giovanni; Hamashita, Takeshi; and Selden, Mark, eds. 2003. *The Resurgence of East Asia: 500, 150 and 50 Year Perspectives*. London: Routledge.

Carino, Theresa Chong. 1998. *Chinese Big Business in the Philippines: Political Leadership and Change*. Singapore: Times Academic Press.

Cartier, Carolyn L. 2001. *Globalizing South China*. Malden, MA: Blackwell Publishers.

Casson, Mark; and Rose, Mary. 1998. Institutions and the Evolution of Modern Business: Introduction. In *Institutions and the Evolution of Modern Business*, edited by Mark Casson and Mary Rose, pp. 1–8. London: Frank Cass.

Castells, Manuel. 2000. *The Rise of Network Society*. Blackwell Publishers.（夏鑄久；王志弘他（訳）.『網絡社会的崛起』北京：社会科学文献出版社．2001.）

Chan Kwok Bun, ed. 2000. *Chinese Business Networks: State, Economy and Culture*. Singapore: Prentice Hall.

Chandler, Alfred Jr. 1977. *The Visible Hand: The Managerial Revolution in American Business*. Cambridge: Harvard University Press.

Duara, Prasenjit. 1995. *Rescuing History from Nation: Questioning Narratives of Modern China*. Chicago: University of Chicago Press.

Gardella, Robert; Leonard, Jane; and McElderry, Andrea, eds. 1998. *Chinese Business History: Interpretative Trends and Priorities for the Future*. Armonk: M. E. Sharpe.

Gomez, Edmund Terence; and Hsiao, Hsin-Huang Michael, eds. 2001. *Chinese Business in South-East Asia: Contesting Cultural Explanations, Researching Entrepreneurship*. Surrey: Curzon.

――――. 2004. *Chinese Enterprise, Transnationalizm, and Identity*. London: Routledge Curzon.

Guibernau, Montserrat; and Rex, John, eds. 1997. *The Ethnicity Reader: Nationalism, Multiculturalism and Migration*. Oxford: Polity Press.

Hamashita, Takeshi. 2002. Competing Political Spaces and Recreating Cultural Boundaries in Modern East Asia: Regional Dynamism and the Maritime Identity of Asia. In *China and Southeast Asia: Changing Social-Cultural Interactions*, edited by Melissa Curley and Liu Hong, pp.27–38. Hong Kong: Center of Asia Studies, University of Hong Kong.

Hamilton, Gary, ed. 1991. *Business Networks and Economic Development in East and Southeast Asia*. Hong Kong: Center of Asia Studies, University of Hong Kong.

――――. 1996. *Asia Business Networks*. Berlin: Walter de Gruyter.

Hobsbawm, Eric. 1990. *Nations and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hsu, Francis L. K.; and Serrie, Hendrick, eds. 1998. *The Overseas Chinese: Ethnicity in National Context*. Lanham: University Press of America.

Jay, Edward J. 1964. The Concept of ‘Field’ and ‘Network’ in Anthropological Research. *Man* 9–10.

Liu Hong. 1998. Old Linkages, New Networks: The Globalization of Overseas Chinese Voluntary Associations and Its Implications. *The China Quarterly* no.155: 582–609.

――――. 1999a. Organized Chinese Transnationalizm and the Institutionalization of Business Networks: The Singapore Chinese Chamber of Commerce and Industry as a Case Analysis. *Southeast Asian Studies*［東南アジア研究］37(3): 392–417.

————. 1999b. Bridges across the Sea: Chinese Social Organizations in Southeast Asia and the Links with *Qiaoxiang*, 1900–1949. In *Qiaoxiang Ties: Interdisciplinary Approaches to "Cultural Capitalism" in South China*, edited by Leo Douw, Cen Huang and Michael Godley, pp.87–112. London and New York: Kegan Paul International.

————. 2001a. Sino-Southeast Asian Studies: Toward an Alternative Paradigm. *Asian Studies Review* 25(3): 259–283.

————. 2001b. Social Capital and Business Networking: A Case Study of Modern Chinese Transnationalism. *Southeast Asian Studies* ［東南アジア研究］39(3): 357–381.

————. 2005. Network Building between the State and Society in the Asian Context. In *State and Civil Society in the Context of Transition: Understanding Non-Traditional Security in East Asia*, edited by Zhang Yuling, pp. 8–35. Beijing: World Affairs Press.

————. 2006. Introduction: Toward a Multi-dimensional Exploration of the Chinese Overseas. In *The Chinese Overseas*, Vol. 1: *Conceptualizing and Historicizing Chinese International Migration*, edited by Liu Hong, pp.1–30. London and New York: Routledge.

Liu Hong; and Wong, S. K. 2004. *Singapore Chinese Society in Transition: Business, Politics, and Socio-economic Change, 1945–1965*. New York: Peter Lang Publishing Inc.

Ma, Laurence J. C. 2003. Space, Place, and Transnationalism in Chinese Diaspora. In *The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility, and Identity*, edited by Laurence J. C. Ma and Carolyn Cartier, pp.1–49. Lanham: Rowan & Littlefield Publishers.

McKeown, Adam. 1999. Conceptualizing Chinese Diasporas, 1842 to 1949. *Journal of Asian Studies* 58(2): 306–337.

Menkhoff, Thomas; and Gerke, Solvay, eds. 2002. *Chinese Entrepreneurship and Asian Business Networks.* London: Routledge Curzon.

Nevadomsky, Joseph-John; and Li, Alice, eds. 1973. *The Chinese in Southeast Asia: A Selected and Annotated Biography of Publications in Western Languages.* Berkeley: California University Center for South and Southeast Asia Studies.

North, Douglass. 1990. *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*. Cambridge: Cambridge University Press.

Omohondro, John T. 1981. *Chinese Merchant Families in Iloilo: Commerce and Kin in a Central Philippine City.* Athens: Ohio University Press.

Rose, Mary. 2000. *Firms, Networks and Business Values: The British and American Cotton Industries since 1750*. Cambridge: Cambridge University Press.

Skinner, G. William. 1957. *Chinese Society in Thailand.* Ithaca: Cornell University Press.

————, ed. 1979. *The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman*. Stanford: Stanford University Press.

Staber, Udo H.; Schaefer, Norbert; and Sharma, Basu, eds. 1996. *Business Network: Prospects for Regional Development.* Berlin: Walter de Gruyter.

Suehiro, Akira. 1989. *Capital Accumulation in Thailand, 1855–1985*. Tokyo: Center for East Asian Cultural Studies for Unesco, the Toyo Bunko.

Sugiyama, S.; and Grove, Linda, eds. 2001. *Commercial Network in Modern Asia*. Surrey: Curzon.

Thornton, Patricia H. 1999. The Sociology of Entrepreneurship. *Annual Review of Sociology* 25: 19–46.

Tien Ju-Kang. 1953. Clanship. In *The Chinese Society of Sarawak: A Study of Social Structure*, by Tien Ju-Kang. London School of Economics Monographs on Social Anthropology.

Wang Gungwu. 1985. The Study of Chinese Identities in Southeast Asia. In *Changing Identities of the Southeast Asian Chinese since World War II*, edited by Jennifer W. Cushman and Wang Gungwu, pp.1–21. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Watson, James. 2002. *Globalization and Culture*. In *Encyclopedia Britannica*.

Yeung, Henry Wai-chung. 2001. Managing Traditional Chinese Family Firms across Borders: Four Generations of Entrepreneurship in Eu Yan Sang. In *Chinese Transnational Enterprise in Prosperity and Adversity*, edited by Leo Douw, Cen Huang and David Ip. Surrey: Curzon Press.

Yow Cheun Hoe. 2003. The Changing Landscape of Qiaoxiang: Guangdong and the Chinese Diaspora, 1850–2000. Ph.D. dissertation, National University of Singapore.